

認知症 日本版BPSDケアプログラム DEMBASEの活用

—ご本人の困りごとに、寄り添い関わるケア—

社会福祉法人奉優会 特別養護老人ホーム等々力の家

勝俣 洋子、方波見 彩花、新木 大介

(高齢者認知症ケア ケアにおける協働・連携)

1. 目的

奉優会 等々力の家は、2001年4月に開所し、これまで多くの認知症の方の入居があり、その方をサポートする方法を学び、身体的、精神的、その他環境整備など様々な側面から多職種連携してケアを実践してまいりました。そのどれもが現在も私たちの介護の基本となっています。

日々認知症の方々と関わる中で、より良い介護ケアについて模索していたところ、私たちは2018年に「認知症 日本版 BPSD ケアプログラム」との出会いがありました。これは、ご本人が何を困りごとと思っているかを分析し、困りごとが解消するよう取り組み、その効果を数値・グラフで表せる方法です。今回これまで取り組んできた日本版 BPSD ケアプログラム DEMBASE の活用について発表します。

2. 実践内容

等々力の家は、2018年度に日本版 BPSD ケアプログラム DEMBASE (オンラインシステム) について、東京都よりその利用認定を受け、進行役となるアドミニストレーターを育成 (世田谷区福祉人材育成・研修センター主催の研修受講) し、現在6名のアドミニストレーターが誕生し、今年度も新たに2名が受講を進めています。

認知症 BPSD (行動・心理症状) には、徘徊、幻覚、不眠、異食など様々あり、1つの症状だけにとどまらず、複数の症状を示される方もいます。それらの行動・心理症状1つ1つを、「ご本人の困りごと」が現れたものと捉え、12項目の視点から評価し結果を数値化します。評価結果を可視化することで、着目点をチーム全体で共有し、基本的な対応方針を決定、ケアを実践し、再評価を行います。

3. 結果

数値が高ければ高いほど、「より困りごとが多い」となり、12項目の中で最も数値が高い項目が本人の中で最も困っている点と考えることができます。個々の課題 (= ご本人の困りごと) に着目し、適切なケアを実践することで、その数値は下がり、行動・心理症状も落ち着くことがわかりました。4人の方の事例を元に、その方お一人おひとりのケアの実行から結果について、ご覧いただきます。日本版 BPSD ケアプログラムは、その効果を数値で的確に示し、私たちが適切なケアを実践できているかどうかを検証できることがわかりました。

4. 考察と今後の課題

これまで、回想法やユマニチュード、日中の活動量の増加など様々なケアを実践したその効果について、「何となく落ち着いてきた」など曖昧な表現をしていました。それが数値・グラフ化することで目に見える形となり、チーム全体で課題や効果を共有することができます。チーム全体で共有するこ

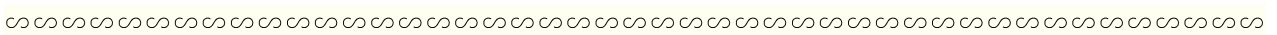
とは、統一したケアの実践につながり、職員のモチベーションの維持・向上にもつながります。

また、日本版 BPSD ケアプログラム DEMBASE の活用により、「課題＝ご本人が今、抱えている困りごと」を明確に見出すことができ、その困りごとを解消することで、身体的にも精神的にも落ち着き、笑顔あふれる日々を過ごすことにつながるようになりました。

今後の展望として、日本版 BPSD ケアプログラムの活用をさらに推進し、等々力の家特養ホームのご入居者に限らず、在宅・地域で暮らす認知症の方々もサポートしていきたいと考えています。



発表者



<助言者コメント>

高橋 裕子（世田谷区世田谷保健所玉川保健相談課長）

（玉川総合支所健康づくり課長兼務）



日本版 BPSD ケアプログラムは、「NPI スケール」を用いて、ご家族や介護職員が認知症の方の対応やケアが困難だと感じる「行動・心理症状」を点数化し見える化することにより、ケアの課題をチームで共有しやすくし、症状の改善を図るというものです。

世田谷区福祉人材育成・研修センターで実施しているケアプログラムの研修では、症状の見える化の方法を学びますが、ケアの方針や工夫は、これまで介護職員のみなさんが学んだり実践してきたケアの手法のなかから、チームで話し合っ実践していただきます。つまり最も重要なことは、発表にもあったように、その課題に対してどのようなケアの方針を立て、チームで実践し工夫していくかということです。日本の認知症医療の指針のなかでも、「行動・心理症状」に対しては「非薬物療法」を第一選択する、すなわち「ケア」でまず改善を図ることになっています。

実践された発表者のみなさまは、一見「ちょっとしたこと」に見えるこのケアの方針や工夫が、思いがけず大きな変化や改善をもたらすことや、「ケア」の持つ力を実感されたのではないのでしょうか。また、認知症のご本人の症状が改善し日々の生活が安定することで、介護職員のみなさんの喜びや仕事のやりがいにもつながったと思います。

今後もプログラムを活用し、認知症介護の質や、職員のみなさんの自信・働き甲斐が向上していくことを期待しています。

日々の忙しい業務の合間をぬっての準備や発表、大変お疲れさまでした。